

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770123

研究課題名(和文) 第1次ロマン派からランボーに至る近代叙情性と「私」の考察

研究課題名(英文) Study on lyrical poetry and the representation of Self from the first Romantics to Rimbaud

研究代表者

深井 陽介 (FUKAI, Yosuke)

東海大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：60623410

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究を行った結果、第一次ロマン派(ユゴー・ラマルチーヌ・ミュッセ)の文学作品中に現れる「私」の特徴が明らかになり、また後の時代のランボーにおける主体性と深くかかわっていることが明らかになった。例えば、ミュッセの『世紀児の告白』とランボー『地獄の季節』は、記憶、夢、錯乱、狂気、主人公の多重人格性や内的葛藤という共通テーマを有しており、多くの類似点があることが明らかになった。ユゴー、ラマルチーヌの作品にもランボーにつながる抒情的主体性があり、近年研究の少なかった第一次ロマン派とランボーの関係性がより鮮明に明確になり、19世紀フランス文学における「主体」の意義が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we tried to establish the specificity of lyricism and lyrical poetry in relation with the Self (Myself) in literary works of the first French Romantics (Victor Hugo, Alphonse de Lamartine and Alfred de Musset) and Arthur Rimbaud. As a matter of fact, Rimbaud's representation of himself is closely linked to the narrative voice and the self-expression of a main protagonist, illustrated by romantic authors. For example, Rimbaud's "A season in Hell" and Musset's "The confession of a Child of the Century", his autobiographical novel, are similar in many ways. They have many themes in common: nostalgia, dreams, main character's insanity, a conflicted personality and the complexity of the Self. Thus, we will argue about the importance of Ego in 19th century French literature.

研究分野：19世紀フランス文学

キーワード：近代フランス文学 ランボー 第一次ロマン派 主体 自伝

1. 研究開始当初の背景

応募者は、この研究を開始するまで、19世紀のフランス詩人、アルチュール・ランボールの作品群に現れる主体の複数性について研究し、ランボー作品内の「私」が多様で複雑を極めることを明らかにしてきた。この結果を踏まえ、本研究では19世紀文学の源泉と言えるロマン派へと遡り、具体的な作品分析を通して、文学作品中の主体を考察するという展望が開けた。というのも、ロマン派、ランボーは共に「私」という主語を作品中で多用する点で類似しているが、ロマン派作家の主観的・経験的主体(実際の実人生を歩んでいる1人の人間としての主体)とランボーの架空で匿名の主体(文学作品中で作られたフィクションとしての主体)が対立するからである。

このような研究を開始しようとするに至った背景として、近年、ジョゼ・ルイズ・ディアーズの研究(2007)など、ロマン主義の作家像に関する新しい研究が発表されたことが挙げられる。ディアーズはポール・ベニシューが示したロマン派の預言者的任務の自負を、通俗的な社会現象の側面から捉え直し、当時の文学が自己アピールの場として機能し、それが作家のアイドル化現象や神聖化につながっていくと論じた。また、ロマン派の作家研究も飛躍的に発展している。例えばミュッセの詩作品や散文作品は軽視される傾向にあったが、例えばフランク・レストランガンによる伝記を通して、表面的な抒情と憂愁に満ちた安易な詩人のイメージが払拭され、後のボードレールとも繋がる先駆者としての側面が見直されつつあり、具体的な作品分析をやり直そうという機運も見られる。

このような近年の成果を踏まえて、応募者は、韻文・散文作品のテーマや文体の具体的な分析から、作品中に度々あらわれる「私」の持つ意味を考察することにした。

2. 研究の目的

本研究は、フランス第1次ロマン派の詩人のうち、とりわけラマルチーヌ・ミュッセ・ユゴーの作品分析を通して、抒情的な主体「私」の意味を明らかにし、それが19世紀後半のランボーに至っていかに変貌するのか、明らかにすることを目的とした。

19世紀前半の第1次ロマン派は「主体」の主観性、抒情性が顕著に表れるのに対して、世紀後半のランボーの「主体」は作家の実人生から離れ、架空で匿名の存在へと向かっていくため、これらの考察を通じて「主体」という概念を巡る研究の基盤を作る目的があった。特にこの研究期間ではラマルチーヌ・ミュッセ・ユゴーの作品に焦点を当てて、後の時代と比較しながら、その抒情性及び「主体=私」の特徴を明らかにしようとした。

例えばケーテ・ハンプルガーは『文学史の理論』の中で、抒情詩においては詩人の「私・

今・ここ」という3点が、文学作品内部の「私・今・ここ」と一致すると論じている。確かに、この特徴は第1次ロマン派の詩には当てはまり、詩は「主体」が個別に経験したことを、あるがままの感情を交えて表現することによって生まれる。現にラマルチーヌ・ユゴー・ミュッセにおいては作家本人の実際の人生で起こったことが作中の「私」を通して語られることが多い。これは、例えばユゴーが『静観詩集』の第一部「昔」と第二部「今」の境に実娘レオポルディーヌの死を設定していることから分かる。

これに対して、ランボーの作品には「私」という主語が頻繁に登場するにも拘らず、その性質が根本的に異なる。ランボーは「自我」や「作者」という概念を否認し、自らの詩的精神を「私とは他者である」と定式化して、主体と言語の普遍性や客観性を志向する。その結果、作品中の主語「私」はフィクション化・匿名化されていく傾向にある。こうして、一見自伝的な作品は、単に個人的体験を書き写すことを超越したものとなる。近代抒情詩の源泉となる「主体=私=作者自身」の詩学が根本的、かつ意識的に変革されているのである。

このように19世紀フランス文学においては作品における「主体」の意味が明らかに変化していく。従って、世紀初めに位置する第1次ロマン派と世紀後半のランボーを比較することで、文学における「主体」とは一体何なのかを明らかにしようとした。またその際、ただ単に詩作品を分析するのみならず、19世紀全体にわたって多く書かれた「自伝」や「告白」など、自分の人生を語ることを主題とする作品における「主体」の意味も明確にしようとした。

尚、この研究では時に軽視されることもあった、第1次ロマン派(特にミュッセ)の作品の文学的意義を再考することも視野に入れた。また、この研究は、「フランス近代詩における主体」というより大きな研究の枠組みの一部を成し、今後は第2次ロマン派やボードレールなどの主体などが研究される予定である。

3. 研究の方法

ロマン派を3つの観点から考察した。

まず、「第1次ロマン派」とみなされるラマルチーヌ、ユゴー、ミュッセにおける抒情性の概念を規定するために、マニフェストとみなされる序文や書簡など、文学概念と関わるテクストを検討した。その為に、まず先に挙げたベニシューやディアーズの先行研究を参考に、第1次ロマン派の抒情性を定義し、詩人たちがなぜ自らの作品内部で感情を真率に吐露し、「主体」を重視しなければならなかったのかを分析した。

次に、第1次ロマン派の作品を分析し、抒情性の概念が如何に主体と結びついているのかを明らかにした。ここでは特に文学作品

の主体「私」が作家の人生と色濃く結びつき、自伝という文学形式へと向かうことに注目し、そこで語られる内容や人生の語り方について論じた。例えば、ミュッセの『世紀時の告白』では自己の悲恋と「世紀病」と言われるナポレオン没落後の挫折感や空虚感が色濃く反映している。このような自伝的作品における主体の特徴を明らかにするために、「私」という主語の出現頻度、それを修飾する形容詞・属詞の性質について網羅的に解析し、作中の「私」という人物の人生に、作者自身（ミュッセ）の実人生がどの程度反映されているのかを検討した。同時に、句読点や頻出単語、頻出テーマ、時制、比喩、アイロニーなどの表現方法、さらには背景となる時代（年号や季節）、場所などテキストの構成に関わる特徴にも注目した。

最後に、第一次ロマン派の叙情性が後の時代に如何に受容されたのかを検討し、とりわけ、ランボーが抒情的主体や自伝というテーマを受け継ぎつつも、それを意識的に解体・変形して新しいタイプの「主体」を創造していく過程を明らかにしていった。

まず、ランボーの「見者の手紙」の手紙の読解から第一次ロマン派をどのように受容・評価していたのかを明らかにしながら、ランボーの実作上の影響について考察した。次に主観的な主体が解体されていく様を明らかにしていった。ランボーはユゴーのような預言者の性質を受け継いでおり、その点ではロマン派的だといえるが、ミュッセのような主情の吐露を特徴とする主体を乗り越えて、普遍的な言語を創造しなければならないと考える。例えば、『地獄の季節』では「錯乱」というロジックを通して、逆説的に自己の一貫性を消去しようと試みるが、この主体について、上記に挙げた句読点や頻出単語、テーマ、時制、比喩、アイロニーなどの文体上の特徴から分析し、ロマン派における主体との違いを明らかにしていった。

4. 研究成果

まず、ロマン派における主体の特徴を明らかにするために、ペニシュの『作家の聖別』、『預言者の時代』、『幻滅の流派』や、ディアーズの『架空の作家』などの先行研究を踏まえて、第一次ロマン派における主体の特徴について分析した。

次にミュッセの自伝的小説『世紀時の告白』をテーマ・文体・主人公の人物像などの側面から詳細に分析し、ランボーの自伝的作品『地獄の季節』の主人公の特徴と比較した。この分析内容・結果は2015年3月にパリ・高等師範学校、及びシカゴ大学パリキャンパスで行われた国際学会で発表され、後に「自伝のフィクション化 世紀児の告白と地獄の季節」というタイトルで論文化された。

この結果、本研究以前の予想に反して、ミュッセとランボーの自伝的作品は、驚くほど似ている点が数多く存在することが明らか

になった。ランボーは「見者の手紙」の中でミュッセを痛烈に批判しており、その詩学を全否定しているが、実はランボーはミュッセの作品をかなり綿密に読んでいた。例えば初期詩編「太陽と肉体」はミュッセの「ロラ」の文体に似ていることはすでに指摘されてきたが、ミュッセの自伝的作品である『世紀児の告白』と自伝的要素を持つランボーの『地獄の季節』もまた、その構造やテーマや文体の面でかなりの類似点があり、第一次ロマン派、及びランボーの散文作品における比較研究に新たな一石を投じることができた。

具体的には、まず構造上の共通点として、両者とも自伝的フィクションであること、共にかなり若い時期に書かれていること、作品に恋愛と別れの場面が存在すること、散文で書かれていることが挙げられる。またテーマでは、過去への後悔、自己否定と自己嘲弄、狂気と錯乱、人格の多重性と自己内部の対話的葛藤などに関して、共通の単語や似たような表現が数多く見つかると、意識的であれ無意識的であれ『地獄の季節』が『世紀児の告白』から多分に影響を受けている側面が明らかになった。

その一方で、ランボーの作品では自伝的言説がより虚構化されていることが明らかにされた。具体的には、ミュッセの作品が19世紀のフランスを舞台としているのに対して、『地獄の季節』は「地獄」という虚構の世界で展開されている。また、情景描写が極端に少なく、物語の内容を自己の葛藤や内的心理の表明に特化して形而上学的である。

発表後はフランスをはじめとする各国のフランス近代詩の専門家との議論も行われたが、概ねの研究者から高い評価と賛同を頂いた。この論文は既にシカゴ大学パリキャンパスの主催者に渡し、現在出版を待っている。

その後、ユゴーの自伝的作品、ラマルチーヌの作品の分析に入ったが、この二人の詩人に関してはコーパスが膨大にあるため、情報を処理するのにかなりの時間を要した。また、本務校において急な事情で教員に欠員が出た為、学内・学外業務が原因で多忙を極めたため、当初の研究計画から遅れを取ってしまった。

ただ、ユゴー・ラマルチーヌに関しても、文体上の様々なデータから、後のランボーにつながる抒情的主体性の特性が明らかになりつつある。本年度9月に、19世紀フランス文学のシンポジウムに参加することもすでに決定しているので、発表・論文化したものを近日中に公開していく予定である。

結論として、1960年代のシュザンヌ・ベルナールの研究以来、第一次ロマン派とランボーの関係性を総合的に論じた研究は少なく、あまり進展が見られていなかったが、本研究を通じて、言わば遅れてきたロマン派としてのランボーの姿がより鮮明に浮き彫りになり、ランボーの詩学が、第一次ロマン派の影

響を多分に受けた上で、独自の文学を展開していることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

FUKAI Yosuke, Fictionnalisation de l'autobiographie, フランス近代詩シンポジウム(ジェームス・ローラー名誉教授追悼記念学会), 2015年3月5日, パリ高等師範学校(フランス).

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深井 陽介 (FUKAI Yosuke)

東海大学国際教育センター

准教授

研究者番号: 60623410

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

ミシェル・ミュラ (MURAT Michel)

パリ第4大学文学部フランス文学科

教授